

## 視点(1962)

## 朝ドラ「まれ」とフランス菓子とデフレ経済とトレーダージョーズ!!

(研究思考と成果の概念編)

朝ドラ「まれ」を寓話(たとえ話・比喩)として、デフレ経済とトレーダージョーズ(アメリカのこだわりSM)の話を書かせていただきます。

朝ドラ「まれ」の主人公まれ(女性)はフランス菓子のパティシエを目指しており、横浜(大商圏)でこだわり・高級フランス菓子の修行をし、家族が住んでいる石川県の能登(小商圏)で本場フランス菓子の店を開くことになりました。横浜で鍛えた自信満々のこだわり高級フランス菓子店(1品450円)を開業し、最初の2週間は満杯で売れに売れましたが、2週間を過ぎると全く売れなくなりました。客に聞くと「すごく美味しいけど、高くていつもおやつとしては買えない」と言われました。「まれ」は地元の健康志向の食材を使い、料理方法にこだわり、誰も真似できないフランス菓子であるので、必ず客は良さを分かってくれるという信念で営業を続けますが、客は全く来ません。客は物珍しさで来店するお上りさん客だったわけです。そこで、背に腹はかえられないため苦渋の選択で安いフランス菓子売ることにしました。しかし、食材は儉約しても能登の新鮮で自然志向のものを使い、かつシンプルだが本場フランス菓子の料理手法にこだわりと珍しさを付加した、誰でもおやつとして毎日気軽に買える値段(150円・200円・250円)で売り出しました。一方、1つだけ徹底的にこだわり、高くても食べたい客のための逸品を450円で販売しました。このドラマの時代設定は2007年(今から8年前)であり、まさに日本経済がデフレで喘いでいた時期です。

通常の経済の時代は「品質が良いが高い商品」と「品質は劣る・希薄であるが廉価」という2つの選択肢で、2つともマーケットに受け入れられます。しかし、デフレ経済は「**努力が報いられない経済社会**」なのです。売り手の10の努力には10の成果、20の努力には20の成果、50の努力には50の成果、100の努力には100の成果が出るのがノーマルな経済時代(ディスインフレ=なだらかな物価高を伴う実質成長経済時代)ですが、デフレ経済時代は、10や20の努力は全く報われず、マーケットは成果(売上や単価アップ)を認めてくれません。50や100の卓越した努力があっても初めて、努力が成果に比例して認めてくれます。それゆえに、ごく少数の企業のみが成長し、特定の企業のみ独り勝ち企業が生まれます。10の努力も20の努力も成果として認められなければ経済は底上げされず、ゼロ成長あるいはマイナス成長となります。

百貨店は1991年のモノ離れ・バブル経済崩壊の後、2013年までの20年間、「品質は良いが値段が高い」という客の不満を解決しませんでしたので、売上高が40%も減少しました。これもモノ離れ・バブル経済崩壊前までは「良いものは高いのが当然」という価値観がデフレ経済によって歪められた結果です。

アメリカに「トレーダージョーズ」という小型SCで、4,000アイテム(通常のSMは2万アイテム)で20~30億円売る食品業態があります。アメリカのインフレ経済・2極化した所得層の中で、低所得でかつ教養のある消費者に好まれています。トレーダージョーズは「おいしくなければならない」「安くなければならない」「健康でなければならない」「珍しくなければならない」の4つのコンセプトの大繁盛型SMです。私は朝ドラ「まれ」を見ながら、能登でつくったシンプルではあるが「廉価志向」で「美味志向」で「健康・自然・地場志向」で、かつ「どこにもないオリジナル志向」のフランス菓子のコンセプトとトレーダージョーズのコンセプトの同一性を感じました。

「まれ」が能登でつくったフランス菓子は、日本のデフレ経済の真っ只中で、まれが努力(おいしい、健康・自然、こだわり)しても安くなければ売れません(成果が出ない)。しかし、1人の客でもいいから喜んでくれる逸品を本場フランス菓子のイメージとして1つだけ残しました。このMDingのバランスを脚本家は見事に表現しています。

今、日本はアベノミクスにより、デフレ経済脱却の方向性に進み、少しずつ効果が出て、努力と成果が一致しつつあり、多くの企業が値上げの方向に進みつつあります。しかし、努力の伴った値上げ=売上に必ずしも結びついていませんが、努力の伴った値上げが成功している事例も増えています。百貨店も「良い品質だけど高い」というデフレ時代の悪評は、今は「良いものは高くても欲しい」というノーマルな経済の中での評価に変わりつつあります。今、日本は2011年からポストモダン消費時代からニューモダン消費へと進んでいます。流通先進国アメリカではニューモダン消費対応の流通業態が続出しています。

(株)ダイナミックマーケティング社<sup>+</sup>

代表 六 車 秀 之